

二〇二三年度 大妻中野中学校

第一回アドバンスト入試
第一回グローバル入試

二月一日午前 問題用紙

国語

座 席 番 号			
			番

受 験 番 号			
			番
			氏 名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて十一ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認してください。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を忘れずに記入してください。座席番号と受験番号は算用数字で記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(ただし、句読点や記号も一字に数えます。)

(1) 戦争を A

ふつう私たちが「戦争」という言葉で思い浮かべるのは、基本的には国家間の戦争です。お国のために戦争に行く、とか、国の政策に反対して平和を訴えるとか、いろいろありますが、戦争にははっきりした「敵国」があつて、その「敵」に対して自分の国が軍事行動をとる、ということなのです。そしてそこで「国のために戦う」とか「武勇を示す」とか「人殺しは嫌だ(だから戦争はしたくない)」とかいろいろな考え方がでてきます。日本の過去の戦争の話で、爆弾三勇士だとか、真珠湾攻撃だとか、特攻隊だとか、戦艦大和が沈んだとかいうのも、すべて国家間戦争が枠組みになっています。

しかし、考えてみると①戦争が今のような国家間戦争になつたのは、そんなに昔のことではありません。村とか国というのはあつたけれども、今のように世界が国家に区分されるという状態が原理的に成立したのは十七世紀半ばのヨーロッパでのことです。その頃西洋で近代国家の形ができていること、つまり国民がいること、そして第三に、中心権力つまり主権があつて一元的に統治されていることです。それを主権国家と言いますが、世界が——当時はヨーロッパが、ということですが、——そういう国家の集まりとして考えられるようになってからの話です。

ここで少しだけ用語について補足しておけば、「ヨーロッパ」というのは、基本的には地名です。それに対して「西洋」というのは「オクシデン

ト」というラテン語の訳で、これはローマ帝国を東西に分けたときの「西洋・西側」にあたり、歴史的には単に地名というより文明的意味合いのこもった使い方をします。詳しくはわたしの『世界史の臨界』(岩波書店、二〇〇〇年刊)を参照していただければよいのですが、とりあえずこの違いを念頭においておいてください。

話を戻せば、ふつう、われわれが*₂想定するのは、そういう主権国家同士の戦争です。ただ、戦争という言葉をもっと広げて考えていくと、昔の部族間の争いとか、さまざまな集団間の武力抗争とか、そういったものも一般的には戦争と言えるでしょう。

ところで、犬の群れ同士は戦争をするのか? 「一〇一匹わんちゃん」のように擬人化された犬は戦争するかもしれない。けれども、②ふつうは犬が戦争するとは言わないでしょう。猿の群れが戦争しているとも言わない。それはなぜでしょう?

「戦争」という言葉にはもうひとつ欠かせない要件があります。それは武器を使って組織的に戦うということです。武器は文明の一部だから、人間の集団がやるのが戦争なのです。

では、なぜ集団間の抗争は起こるのか。人間が狩猟採集生活をしていた頃は、あの辺りに木の実がたくさんありそうだとそこへ行ってみたら、もうすでに他の集団がいた。俺たちは何十キロも歩いてきたのにあいつらが先に! ということで争いになったとしても、それは単なる奪い合いであ

って、まだ戦争という言葉には馴染まないでしょう。餌場の取り合いというのは喧嘩とは言いかもしれないけれども、戦争ではない。

それが、狩猟採集生活の段階を抜けて、農耕するようになるでしょう。この場合は野菜ではなく、穀物栽培です。基本的には保存できる食糧ですね。農耕のためには集団が定住しなければなりません。定住して、穀物を栽培して収穫する。それは保存食糧になります。するとこれが人間にとつての最初の富となり蓄積財産となるでしょう。集団が富を持つようになる。この富は、お金ではなくて、命をつなぐことができる決定的な財産です。そうするとその財産の管理とか富の分配をめぐって、定住する集団内部で力関係や秩序ができる。そうやってその集団には定着した組織ができてきます。そこに、外敵が富を奪いにやってくる。もちろん集団で武装して。すると互いに皆が武器をとって戦い合うようになります。それがたぶん戦争の祖型だと言つてよいでしょう。③ そういう争いは残念ながら避けがたい。

そして武器が発達していつて、集落の守り方も戦い方もそれに従つて進歩してゆきます。戦車とか飛び道具ができたりします。そうすると、しだいに戦いに優れた大きな勢力が生まれ、そういう勢力が周りを平定していきます。例えばアッシリアとかエジプトとか。もちろん中国でもそうでした。戦争というのはそういうふうにして大きくなってゆきました。

(2) 集団が B にまざる時

ところで、原理的に言つて、単独の人間というのは存在しません。人間は集団生活をしています。どういふことかと言うと、人間は言葉を使うでしょう？ 言葉というのは、周りにそれを使つている人間が大勢いなければなりません。言葉はつねに一人ひとりの人間より先にあったわけです。その言葉と共同性というのは切つても切れない関係があつて、その関係の中でわれわれは一人ひとり人間になってゆく。だから人間というのは基本的に集合的存在であつて、単独の人間というのは想定できません。

だから必ず集団があるわけですが、昔の集団の場合は、洋の東西を問わず、個人の独立といった意識は今ほど重要ではなかったでしょう。とはいつてももちろん、体や心は別々で、生きているのは一人ひとりであつて、顔も違えば名前も違う。それぞれ考えることも違う、区別された個人です。そんなふうにならなければならないけれども、一人ひとりが当たり前に個でありうるのは平時、普通の、平穏な時です。

けれども、ひとたび他の部族と戦つたとなると、④ 個は集団の要素になる。 何のために戦うかという、自分の属する集団を守るためだからです。その時には、あらゆる個の行動は集団のためのものとして統合される。そうでなければ戦いになりません。平穏な時は一人ひとりの個であるけれども、そうでない時、つまりそれを「非常時」というわけですが、その時には磁力がかかったように人びとは一斉に集団に統合されます。

皆が集団として戦います。けれども、その中で人並み外れて優れた働きをすると、そういう者が英雄になる。功労者になる。その英雄が倒れると、集団のために身を犠牲にした、そして自分たちを救つてくれたというので祀られる。それが神と崇められたり、その子が権力者になったりする。そんなふうにして、非常時である戦の時の功績というのは、共同体の中でたいへん重要な意義を与えられます。

それがときに部族の創設神話の主人公にもなる。われわれの三代前に河向うの大きな部族との戦があつて、その時われわれの部族はまだ小さかつたけれども、あの英雄のお蔭で勝ち、大きく発展して今の繁栄がある、とか。英雄がこの国の基礎を造つたといった、集団ごとの物語があります。そうしてその物語をみんなて共有する。それが仲間意識や部族の誇りを作り、その英雄に続けと言つて、次の戦の時にはそれを模範にみんなが戦うことになる。そして、一人ひとりの死は集団の存続のための「犠牲」だとして意味づけられ、そういうかたちで集団が固められてゆきます。

そこで、まずひとつ言えるのは、平時があつて非常時がある。その「非常時」の特徴は何かというと、個に対して集団が圧倒的に優位に立つということと、いわば集団が個に勝利するというのが非常時です。一人ひとりの生には意味はない。一人ひとり死んでも、集団が生き延びればよい、ということと、^⑤ そういう関係は平時には潜在化しますが、平時にも集団を組織する仕組みとして浸透してはいるでしょう。

非常時には、個を呑み込んで集団全体がいわば、^⑥ 励起されるわけです。それが個にも個を超えた力を発揮させる。一人が倒れると、よし、お前の分までと、普段は頼りなくても、このときばかりは奮起して敵を何人も倒したりと、異様な力を発揮する人がいる。それをあれは人間ではない、人を超えた鬼神だ、血まみれになって怖い、というので畏れられながらも讃嘆される。怖いものを崇める、その御利益にあやかるとか、そういう関係もありますね。それは崇拜というもののひとつの起源でしょう。

勝つた方はそうとして、では敗れた方はどうなるか。場所や状況にもよるでしょうが、敗れると、男は奴隸となり、女は戦利品となつて、その分、勝つた共同体が豊かになる。そうして勝つた側だけの物語が残ることになります。

ただ、もう一つ生まれるものがある。それがエレジー（哀歌）ですね。こんなふう^⑦に国の人びとは雄々しく戦つたけれども、その甲斐もなく、故郷は敵に蹂躪され、父兄弟はみな倒れ、あるいは捕囚となり、喪失や滅亡を嘆き悲しむ女たちの哀歌というの残ります。また、そんな哀歌を作ることで生き延びることが出来ます。悲しみが内に籠つてしまうと気が狂つたり、水に飛び込んだりしてしまふけれども、こういう極限状況では、哀歌を歌うことで人は悲しみに表現を与え、死者たちを記憶し、表現することで生き延びてもゆくの^⑧です。悲しみの感情さえ生きる糧になる。

また、戦を見聞きした人が出来事を叙事詩に替えたりする。そういうところに文学の起源があります。そう考えるとまさに昔の人（たとえばギリシアのヘラクレイトス）が言つたように、戦いは万物の生みの X だったの^⑨かもしれません。技術は進歩するし、芸術まで生まれる。そして、それから信仰の形も生まれるのですから。

(3) 戦争はリセットと C の元となつてきた

もうひとつ、「非常時」の特徴は、殺人が解禁されるということです。前章で少しふれたように、人間はお互い基本的に殺さないということがないと成立しません。だから殺さない。それでも殺人を犯す者がいると共同体がそれを罰します。けれども、戦の時には、人間社会を成り立たせているこの「禁止」というものが、「敵」に向かつては解除される。むしろ、殺せ、と推奨されさえします。そしてめざましく敵を倒した者が顕彰さ

れる。⑥ ⑦ という意味では、戦争では、人は半ば人間ではなくなるわけです。それが「非常時」です。要するに、戦争のもうひとつの性格というのは、「殺人の禁止」が「敵」に向けて解除されるということですね。戦争では基本的に何をやるかということ、破壊と人殺しです。それが戦争の原型になっていて、文明の発達に従っているいろいろな様相を変えてゆくわけです。

争いというのはたぶん人間社会では避けられないことなのだろうと思います。皆がお互い仲良くしようと思っても、それぞれの共同の都合とか内部事情とかで、内でも外でも衝突しょうとつが起こってしまうかもしれない。その結果、現実として戦争は途絶とつえたことがなかった。そして力の強いところが出てくると、それが広域を支配して帝国と呼ばれるものを作つてゆく。その帝国秩序内では平和ということもあります。一面ではそれは抑圧の全面化だともいえますが。そういうことが世界の各地域で起こつてきました。

もしも、圧倒的な権威けんいがどこかにあり、戦や争いをしてはいけなくて強力的な力でもつて人びとを抑え込めば、戦争は起こらないかもしれない。そういうことを理想として掲かかげたのは例えばキリスト教でした。世界には創造主があり、その創造主に万人がひれ伏せばそこは神の国になると。けれども、キリスト教もそれは理想であるということを隠していません。それは「天の国」だからこそ実現出来ることで、「地上の国」は欲望と憎悪そうおが渦巻く争いに満ち、地上には平安はないのです。(事実、キリスト教はそれ自身が最も激しい戦争の原因にもなつてきました)。それでもそこに神の一条の光がさすというのは、平和を求める気持ちに皆にあるということでしょう。とはいえ基本的に人間の峻あやなす集団的な暴力をどうすることもできません。もしかするとその暴力の本質的な部分は、人間のようなものが生きてゆくということと不可分の力なのかもしれません。

Y

本当にキリスト教が全世界に広まって、みんながキリスト教徒になつて、^{*6} 敬虔けいけんで理想的なキリスト教徒になるとしたら、そこに天国は実現されるかもしれません。けれども、その世界はひよつとすると死の国と同じかもしれない。みんなが死んでいるのと同じような状態……。 「天国」というのは死後にしか訪れないものだから、キリスト教の理想とはそういう^{*7} パラドクスめいたものなのかもしれない。「全世界が平和になつた」ということは、皆死んでしまつたということかもしれない。それは仏教の理想とも似ています。悟りを開くということは人間が^{*8} 煩惱ぼんのうから解放されてニルヴァーナ(涅槃ねはん)に入ること、釈迦しやくかの入滅にゅうめつというものは死ぬことでしょう。死んだらもうどんな欲望も災いもないからニルヴァーナです。だとしたら、人間の生きる理想の境地というのは「死」なのかもしれないということになつてしまう。けれども、死なない限りで、つまりは安らぎから隔たつている限りで、人間は生きています。

生きるというのはそういうふう複雑なことのようです。一人ひとり違つて、それが大勢集まつているのが人間世界です。それが全部協和すると

は限らない。協和するというのは強制か無力化によってしかできなくて、そうなっていくと皆生きていないのと同じことになってしまう。人びとが生きている時の多様性というのは、いろいろな軋轢を生みだしたりもする。それをどうやって避け緩和するかということは人間が常々考えてきていることです。

社会の組織化というのもそのことと深く結びついているように思えます。どうやって⑦争いや惨劇、あるいは暴力の爆発を防ぐか、抑制するかということと結びついていると思います。けれども、素朴に考えれば、戦争は避けられないし、集団間の争いは避けられない。それは暴力の方向づけられた解放として出てくるし、その時に個は意味を持たないし、その混乱はまた結果的にさまざまなものを生み出す坩堝にもなります。

戦争はそのように、人間社会のリセットと展開の元になってきました。それによって作られる平和な秩序があったことも確かです。初めは両者はそのまま地続きだったことでしょう。それがどう分節化されてゆくかというのが、いわゆる文明の発展を刻んできたのだと考えられます。そんなことをまず念頭において考えてゆこうと思います。

(西谷修『戦争とは何だろうか』ちくまプリマー新書より)

〔注〕

- * 1 恒常的…常に変わらず、変化がない様子。
- * 2 想定…ある状況や条件を仮に決めること。その決めた考え。
- * 3 祖型…原型のこと。
- * 4 平定…乱を鎮めて、世を安定させること。
- * 5 励起…外からの力が加わることで、元の状態からエネルギーの高い状態になること。
- * 6 敬虔…神を敬い、慎み深いこと。
- * 7 パラドクス…矛盾
- * 8 煩惱…人間の心身を悩ませ苦しませる、あらゆる分別のない思い。

問一 次のア～エは、小見出し(1)「戦争を」A (2)「集団が」B にまさる時 (3)「戦争はリセットと」C の元となってきた」の各空欄に対応する語です。組み合わせとして最も適当なものをア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. A—さかのぼる	B—個	C—展開
イ. A—なつかしむ	B—国	C—展開
ウ. A—おもいだす	B—国	C—悲劇
エ. A—ふりかえる	B—個	C—悲劇

問二 ——部①「戦争が今のような国家間戦争になった」とありますが、このようになったのはいつからですか。本文中の語句を使って四十字以内で答えなさい。

問三 ——部②「ふつうは犬が戦争するとは言わないでしょう。猿の群れが戦争しているとも言わない。」とありますが、なぜですか。この理由を説明した次の一文の空欄にふさわしい語句を本文中から探してそのまま抜き出しなさい。

戦争は、人間の「――」が「――」を使ってやるものだから。

問四 ——部③「そういう争い」とはどのような争いですか。次のア、イ、エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 定住した人間を守るための争い。
- イ. 力関係や秩序を作るための争い。
- ウ. 餌場の優先権をめぐる争い。
- エ. 保存できる食糧をめぐる争い。

問五 ——部④「個は集団の要素になる。」とありますが、どのようなことですか。次のア、イ、エの中からその説明として最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 個人が、非常時には平時以上に一人ひとり区別されずに扱われるようになること。
- イ. 個人が、非常時には自分の所属する集団を守るためのものとして統合されること。
- ウ. 個人が、非常時には自分の所属する集団のために人並外れた力を出せるようになること。
- エ. 個人が、非常時には言葉を共同して使っている大勢とともに集団生活をいとむこと。

問六 ——部⑤「そういう関係は平時には潜在化します」とありますが、どのようなことですか。次のア、イ、エの中からその説明として最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 個に対して集団が圧倒的に優位に立つ関係が、普段は表にはっきりと出ずに、裏に隠れていること。

- イ. 集団に対して個が圧倒的に優位に立つ関係が、普段は表にはつきりと出ずに、見落としがちなこと。
 ウ. 集団に対して個が圧倒的に優位に立つ関係が、普段は裏に隠れているのに、見つかってしまうこと。
 エ. 個に対して集団が圧倒的に優位に立つ関係が、普段は裏に隠れているのに、急に表に出てしまうこと。

問七

【X】にふさわしい漢字一字を答えなさい。

問八

——部⑥「そういう意味では、戦争では、人は半ば人間ではなくなる」とありますがなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 戦争では、お互いを殺さないという人間社会を成り立たせている禁止事項が解除されることで、人間が人間である前提が崩れてしまうから。

イ. 戦争では、共同体による罰という人間社会を成り立たせている禁止事項が無視されることで、人間が人間である前提が崩れてしまうから。

ウ. 戦争では、共同体がお互い何とか仲良くしようと努力することを放棄してしまうことで、人間が人間である前提が崩れてしまうから。

エ. 戦争では、強い共同体が弱い共同体を支配して帝国と呼ばれるものを作ろうとする中で、人間が人間である前提が崩れてしまうから。

問九

【Y】には、次のa～dの文が入ります。a～dを文意が通るように並べ替えた時の順番として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- a. そして集団として動く場合には、今度は集団の力として統合されて同じ方向に向かう。
 b. だからその一人ひとりの力というのは集団全体を高めるためにも働くし、集団が争いを起こすためにも働く。
 c. 要するに一人ひとりが生きる力はそれぞれ働くけれども、一人ひとりには集団をなして集団の中で生きている。
 d. だからそれが抑えられることはない。

ア. a—d—c—b

イ. a—b—c—d

ウ. c—b—a—d

エ. c—d—a—b

問十 — 部⑦「争いや惨劇、あるいは暴力の爆発」とありますが、これを防ぐ方法について述べている部分を — 部⑦よりも前から探して、解答欄の「〜こと」に続くように二十字以内にまとめて答えなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 次の — 部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 大雨による土砂崩れで道路が寸断された。
- ② 隣の猫が和室の障子紙を破いてしまった。
- ③ 彼はいくつもの言語を操ることができる。
- ④ 父は地元の銀行に会社の資金を預けている。
- ⑤ 国交を樹立した国に初めて使節団を派遣する。

問二 次の①〜⑤の語について、類義語(Ⅱ)や対義語(Ⅲ)になるように、適する漢字のよみを語群から一つずつ選び、漢字に直して答えなさい。

- | | | |
|--------|--------------------------|--------------------------|
| ① 過失 Ⅱ | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ② 方法 Ⅱ | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ③ 独立 Ⅱ | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ④ 安全 Ⅲ | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| ⑤ 単純 Ⅲ | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |

【語群】 ふくむつ しっぱい じりつ きけん しゅだん

B ことわざ・慣用句に関する問題

問三 次の四字熟語の□に当てはまる漢数字一字を答えなさい。

- ① □目 瞭然りょうぜん
② 岡目 □目
③ □里 霧中
④ 二束 □文
⑤ 千変 □化

C 文法・言葉づかいに関する問題

問四 次の各文の□に当てはまる最も適当なものをア～エより一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① この会議には□君にも参加してほしい。
ア. さて イ. ずっと ウ. ぜひ エ. たぶん
- ② これは□嵐の晩のできごとだった。
ア. どの イ. ある ウ. あらゆる エ. どんな
- ③ 海外の空港で懐かしい友人と□出会った。
ア. ばったり イ. うっかり ウ. あっさり エ. ずっと
- ④ 君にこの映画を見ることをすすめよう。□、原作の本を読んだかね。
ア. あるいは イ. ところで ウ. それゆえ エ. つまり
- ⑤ お飲み物はコーヒーにしますか。□お茶にしますか。
ア. そして イ. では ウ. ところで エ. それとも

問題は以上です。

